

飯島賢二の『恐縮ですが...一言コラム』

第 448 回 だんしがしんだ

2011. 11.27

「回文」(かいぶん)と言う言葉遊びがある。

たとえば「しんぶんし」(新聞紙)、上から読んでも下から読んでも、文字や音節の出現する順番が変わらず、言語としてある程度意味が通る文字列のこと。

「寝ると太るね」とか、「確かに貸した」とか、「世の中ね、顔かお金かなのよ」とか・・・
声を出して読むと納得であろう。

だんしがしんだ...「回文」の好例として、本人も面白がっていた。

「談志が死んだ」が、本当になった。サンスポ風に言えば...

...落語界の風雲児・立川談志さん、死去... 歯にきぬ着せぬ毒舌で注目を集めた落語家で、元参院議員の立川談志(たてかわ・だんし)さんが21日に喉頭(こうとう)がんのため死去したことが23日、明らかになった。75歳だった。(11.24 サンケイスポーツより)

これでかつての、『江戸落語四天王』と呼ばれた五代目春風亭柳朝、三代目古今亭志ん朝、五代目三遊亭圓楽、そして五代目立川談志は、誰もいなくなった。

(柳朝死去後は八代目橋家圓蔵と言われたが、オレ流に言えば、これはいただけないので除外)

荒唐無稽、破天荒ぶりから談志ほど、好き嫌いが大きく分かれる、好き嫌いがはっきりしている芸人はいなかったと思う。

こよなく志ん朝が好きだった僕も、決して好きなタイプではなかった。

でも、芸人としては間違いなく超一流、談志の噺は無視できない、敵(かな)わない、現代噺家(はなしか)の、数少ない「平成の名人」だった。

古典落語に広く通じ、現代と古典との乖離を絶えず意識しつつ、永年にわたって理論と感覚の両面から落語に挑み続けていた。古典落語を現代的価値観・感性で表現し直そうという野心的努力は、特に評論家や識者に高く評価されていた。

談志という芸人の真髄は...自ら、こんなことを語っていた。

...落語はね、赤穂浪士の四十七士以外の、逃げちゃった奴等が主人公なんだ。

人間は寝ちゃいけない状況でも、眠きゃ寝る。酒を飲んじゃいけないと、わかっていてもついつい飲んじゃう。それを認めてやるのが落語だ。客席にいる周りの大人をよく見てみる。昼間からこんなところで油を売ってるなんてロクなもんじゃねエヨ。

でもな、努力して皆偉くなるんなら誰も苦労はしない。努力したけど偉くならないから寄席に来てるんだ。『落語とは人間の業(ごう)の肯定である』。よく覚えときな。...

欠点だらけの人間の生きざまを、卓越した心理描写で語る「芝浜」や「紺屋高尾」などの人情噺(ばなし)が素晴らしいが、「柳派」のお家芸・滑稽噺も見事にその伝統を受け継いで、チンケな安芸人とは違った、質の高い爆笑を招いてくれたものである。

「三方一両損」、「居残り佐平次」、「品川心中」、「三軒長屋」、「明烏」、「富久」、「粗忽長屋」、「黄金餅」、「風呂敷」、「浮世床」、「つるつる」、「権助提灯」など、談志芸の凄さを知ることができる。

...合掌...